ダニエルの書 – 第百十九号

歴史的道標の預言的意義：聖書的象徴を通して終末時代を理解する

Jeff Pippenger
2024-03-06

十四万四千人は、契約の使者によって清められた者として表されており、大群衆は殉教者の白い衣によって表されている.終わりの時の二つの聖なる期間のうち第一は、契約の使者のために道を備える使者の働きを示し、第二の期間はエリヤの働きを表す.第一の期間は、ラオデキヤ的アドベンチズムの生ける者に対する調査審判を表し、第二の期間は現代のローマに対する執行審判を表す.

終末に、都市から逃げるべきであることを示す「しるし」は、ラオデキア的アドベンティズムによって誤解されてきた.ホワイト姉妹は、紀元66年から70年にかけてのエルサレムの滅亡が、終末の神の民への警告のしるしを例証していると教えている.

> 遠からぬ将来、初期の弟子たちのように、私たちも荒涼とした人里離れた場所に避難所を求めざるを得なくなる.ローマ軍によるエルサレム包囲がユダヤ地方のキリスト者にとって避難の合図であったように、教皇の安息日を強制する法令によってわが国が権力を行使することは、私たちへの警告となる.そのときには、山中の人里離れた場所にある隠棲の住まいへ移るために小都市をも離れる備えとして、まず大都市を離れるべき時となる. Testimonies, 第5巻、464ページ.

逃げるべき合図となったエルサレムの包囲は、ケスティウスによる最初の包囲だった.したがってケスティウスの脅威は一時的に取り除かれた.というのも、彼はいったん包囲を敷くと、その後は不可解にも撤退してしまい、なぜそうしたのかという理由を歴史家たちはいまだに突き止められていないからである.

> ケスティウスの指揮下にあったローマ軍がその都市を包囲した後、万事が直ちに攻撃するのに有利に見えたとき、彼らは思いがけず包囲を解いた.大いなる論争, 31.

1880年代と1890年代に、ニューハンプシャー州選出のヘンリー・W・ブレア上院議員は、日曜日を「国民の休息日」と定めるための一連の法案を連邦議会に提出した.これらの法案は一般に「ブレア日曜法案」と呼ばれた.ブレア上院議員は、日曜日を休息と宗教的礼拝の日として守ることの強力な擁護者であり、統一された休息日がアメリカ社会に道徳的・社会的に良い影響をもたらすと信じていた.彼の取り組みは、特に宗教団体から一定の支持を得たが、政教分離に対する懸念などを含む反対にも直面した.

やがて日曜法を可決する際に竜のように語ることになる「地の獣」の歴史において、これは日曜立法を可決しようとする最初の試みであった.1888年の総会会期の使者の一人であったA・T・ジョーンズが連邦議会に赴き、雄弁に反対したのが、この一連のブレア法案である.数度の試みの後、ブレア上院議員の国家的休息日の推進は勢いを失った.その歴史および国家的休息日（日曜日）の含意に直接関連して、エレン・ホワイトの勧告に関する歴史的記録を検討することができる.

彼女の「日曜法」に関する警告を見直して明らかになることは重大であり、ラオデキヤ的なアドベンチズムでは広く誤解されている.先に引用した一節では、都市の外にいる必要があるという文脈で、彼女は「その時には、まず大都市を離れ、その後は小さな町々も離れて、山間の人里離れた静かな場所の住まいへ移る準備をすることになる」と記している.彼女は神の民は田園に住む必要があると繰り返し教えたが、1888年以前の田園生活に関する彼女の助言では、都市を離れるという指示を、近い将来神の民が都市を去らねばならなくなるという文脈に位置づけていた.1888年以降、田園生活に関する彼女の書面での指示においては、私たちはすでに都市を離れているべきだという助言から、彼女が逸脱することは決してなかった.

歴史に登場したブレアの全国休息日法案は、都市を離れるための「しるし」であった.ブレア法案はその遂行に必要な勢いを失い、歴史の闇に退いたが、逃れよとの「しるし」は与えられていた.それは、ケスティウスによってもたらされた第一の包囲という歴史的な道標の時点で与えられていた.間もなく来る日曜法はティトゥスの包囲によって表されており、その包囲が到来したときにまだ都市にいるラオデキヤ的なアドベンチストがいれば、彼らは悪しき者たちと共に死ぬだろう.

終わりの時代には二つの預言的な期間がある.それらは、間もなく来る日曜法によって隔てられている.第一の期間は、ラオデキア的アドベンティズムにおける生者に対する調査審判であり、第二の期間はローマの淫婦に対する執行審判である.これら二つの期間は繰り返し示されている.というのも、ミラー派の歴史においてそうであったように、十人の乙女のたとえが文字どおり成就するのはまさにこれら二つの期間においてだからである.このたとえにおける遅延の時はハバクク書2章の遅延の時であり、したがって、私たちが考察しているこの二つの期間もハバクク書2章によって示されている.十人の乙女のたとえとハバクク書2章はミラー派の歴史において文字どおり成就し、そしてそれが成就した時、エゼキエル書12章21～28節もまた成就した.

エゼキエル書12章の最後の八節は、「すべての幻の成就」が果たされ、神がその幻を「もはや引き延ばさない」時を示している.ラオデキア的アドベンティズムにおける生ける者の調査審判と、ツロの淫婦の執行審判を示す、しばしば繰り返される二つの歴史的期間は、聖書のあらゆる幻が完全かつ最終的に成就する預言的な時期である.その時期に十四万四千人が確立され、彼らは死ぬことのない、キリストの再臨まで生きる一群を表している.ルカによる福音書21章で、キリストはその世代の到来を示す「しるし」を挙げておられる.

「荒らす憎むべきもの」に関連してキリストが示された、逃れよという「しるし」によって表される二つの歴史において、二つの時期が区切られており、その始まりと終わりには、始まりに一つの「しるし」が、終わりに複数の「しるし」がある.キリストが、雲に乗って来られるまで生きることになる最後の世代を示すものとして指し示されたその「しるし」は、私たちが今や地上の歴史の最後の世代にいることの証拠である.

ルカによる福音書21章において、イエスは、西暦66年から70年にかけての、文字どおりのエルサレムが踏みにじられ破壊された三年半から、538年に始まり1798年に終わった霊的エルサレムの踏みにじりの三年半の終わりに至るまでの歴史を示している.

> エルサレムが軍勢に取り囲まれているのを見たなら、その荒廃が近いことを知りなさい.そのとき、ユダヤにいる者たちは山々へ逃げなさい.その中にいる者たちは出て行き、地方にいる者たちはそこに入ってはならない.これらは報復の日であり、書かれているすべてのことが成就するためである.しかし、その日には、身ごもっている女と乳を与えている女はわざわいだ.というのも、その地には大きな苦難があり、この民に怒りが臨むからである.彼らは剣の刃に倒れ、すべての国々に捕らえ移される.そして、異邦人の時が満ちるまで、エルサレムは異邦人に踏みにじられる.ルカによる福音書 21:20-24

異邦人がエルサレムを踏みにじる「時」は複数形である.というのも、それは西暦70年に終わった文字どおりのエルサレムの踏みにじりと、1798年に終わった霊的なエルサレムの踏みにじりの双方を表しているからである.異邦人は異教と教皇主義の双方を表し、「いつまでか」と問うダニエル書第八章の幻の主題は、まさにその二つの勢力である.

> そのとき、私は一人の聖なる者が語るのを聞いた.すると、別の聖なる者が、語っていたあの聖なる者に言った.「日ごとのささげ物に関する幻と、荒廃をもたらす背きは、聖所と軍勢の双方が踏みにじられることになるまで、いつまで続くのですか.」ダニエル書 8:13.

ルカによる福音書21章の「異邦人の時」は、紀元前723年に始まり1798年に終結した、北王国に対する神の裁きの2520年間を指している.538年は、不法の人が聖なる所に立って自分は神であると宣言した時を画し、その結果、その期間は1260年ずつの二つの等しい期間に分けられた.後半の1260年は、「異邦人の時」が成就したと記されるルカ21章24節で終わりが示されているのと同じ歴史である.イエスが弟子たちに示している歴史的叙述において、24節は、弟子たちに与えられた証言を1798年の「終わりの時」へと導く.そこからイエスは、ミラー派運動に関連する「しるし」を示し始める.

> そして、太陽と月と星にしるしが現れ、地上では諸国民が途方に暮れて苦しみ、海と波が鳴りとどろく.人々は、地上に起ころうとしている事柄を思って恐れにおののき、気を失うであろう.天の諸々の力が揺り動かされるからである.そのとき、人々は、人の子が力と大いなる栄光をもって雲に乗って来るのを見るであろう.これらのことが起こりはじめたなら、身を起こして頭を上げなさい.あなたがたの贖いが近づいているからである.ルカによる福音書 21章25-28節.

イエスは「しるしが現れる」と述べ、それらを、太陽と月、そして星に現れるしるし、諸国民の苦悩、天のもろもろの力が揺り動かされること、そしてその後に人の子が雲に乗って来ることとして示した.これらの「しるし」はすべてミラー派の歴史において成就した.

> 預言は、キリストの来臨のあり方とその目的を予告するだけでなく、それが近いことを人々が知るためのしるしも示している.イエスは言われた、「太陽と月と星にしるしが現れる.」（ルカ21:25）「太陽は暗くなり、月はその光を放たず、天の星は落ち、天にある諸々の力は揺り動かされる.そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見るであろう.」（マルコ13:24-26）黙示録の記者は、再臨に先立つ最初のしるしをこのように述べている.「大地震が起こり、太陽は毛の荒布のように黒くなり、月は血のようになった.」（黙示録6:12）

これらのしるしは十九世紀の幕開け前に目撃された.この予言の成就として、1755年に、これまでに記録された中で最も恐ろしい地震が起こった.……

二十五年後、預言に挙げられていた次のしるし-太陽と月が暗くなること-が現れた.これをいっそう際立たせたのは、その成就の時が明確に示されていたという事実である.救い主がオリーブ山で弟子たちに語られたとき、教会にとっての長い試練の期間-その患難は短縮されると約束された、教皇権による1260年の迫害-を述べられたのち、御自身の再臨に先立って起こるいくつかの出来事について言及し、その最初のものが目撃される時を定めてこう言われた.「その日には、その患難の後、太陽は暗くなり、月はその光を放たない.」（マルコ13:24）1260日、すなわち1260年は1798年に終わった.その四半世紀前には、迫害はほとんど完全にやんでいた.この迫害に続いて、キリストの言葉のとおり、太陽は暗くなるはずであった.1780年5月19日、この預言は成就した.……

キリストは、ご自分の民に、ご自身の来臨のしるしを見張り、やがて来られる王のしるしを目にするときには喜ぶよう命じられた.『これらのことが起こり始めたなら、身を起こして頭を上げなさい.あなたがたの贖いが近づいたからである.』彼は弟子たちに春に芽吹く木々を指し示して言われた.『木々が今芽を吹き出すのを見ると、あなたがたは自分で夏がもう近いと見て知る.同じように、これらのことが起こるのを見たなら、神の国が近づいていることを知りなさい.』ルカによる福音書21章28節、30節、31節.『大争闘』304、306-308頁.

三つのローマの三重適用は、異教ローマによるエルサレムの踏みにじり、続いて教皇ローマによる踏みにじりにおいて、現代のローマによる聖所と軍勢の踏みにじりが、（異教ローマでは）一千二百六十日、（教皇ローマでは）一千二百六十の預言的年という期間によって象徴されていることを示している.神の忠実な民に対する現代のローマの迫害の期間を示す象徴的一千二百六十日（四十二か月）を含め、各期間の初めには、その時代の忠実な者が逃れるべき時を指し示す固有の「しるし」が一つ与えられる.三つの各期間は、始まりの単一の「しるし」とは異なり、終わりには複数の「しるし」の顕現をもって締めくくられる.

真夜中にこそ、神はご自分の民の解放のために、その御力を現される.太陽が現れ、その力強い輝きを放つ.しるしと不思議が続けざまに起こる.悪しき者たちは恐怖と驚愕をもってその光景を見つめ、義人たちは厳粛な喜びをもって自らの解放のしるしを仰ぎ見る.自然界のあらゆるものが、本来の秩序を外れたかのように見える.川の流れは止み、黒く重い雲が湧き上がって互いにぶつかり合う.荒れ狂う天のただ中に、言葉に尽くしがたい栄光をたたえたひとところの晴れ間があり、そこから多くの水の轟きのような神の声が響いてくる.「事は成った」と.黙示録16章17節.大争闘、636.

ローマの淫婦に下る執行審判の期間は、いまだバビロンにいる神の他の群れが逃れ出るべきことを示す旗印が掲げられることから始まる.その期間は「しるしと不思議」をもって終結する.その期間は黙示録18章の「第二の声」から始まり、神の御声をもって終わる.もちろん、黙示録18章の第一の声と第二の声はキリストの御声である.第一の声は、ラオデキヤ的アドベンチスト教会の生ける者に対する調査審判の開始を示し、第二の声はその期間の終わりを示すが、同時にローマの淫婦に対する執行審判の開始も画する.

全歴史は、キリストが契約を確証された週によって規定されており、まもなく到来する日曜法は、十字架を型とする中間の道標として表されている.両方の歴史にはアルファとオメガの刻印がある.というのも、どちらの歴史においても始まりと終わりは神の声によって表されているからである.また、それらは真理をも表している.なぜなら、中間の道標は日曜法という反逆であり、ヘブライ語の「真理」という語はヘブライ文字の第一、十三、最後の文字で成り立っているからである.黙示録18章の最初の声はキリストの声であり、最後の声は神の声である.そして中間の声もまた神の声であるが、そこは同時に、黙示録13章に示されているように、地の獣が竜のように「語る」ことによって、第十三の文字の反逆が表されるところでもある.

まもなく到来する日曜法における旗印は、神の忠実な民が逃れるべき「しるし」を表しているが、同時に、旗印が掲げられて終わるその予言的期間の始まりにもまた「しるし」があるべきだということも示している.その「しるし」こそ、地球の最後の世代が到来したことの証拠としてイエスが指摘したものである.ルカによる福音書第21章で、弟子たちは、キリストが神殿が破壊されると示したことの意味を尋ねた.

> そして彼らは彼に尋ねて言った.「先生、では、これらのことはいつ起こるのですか.また、これらのことが起こるときには、どんなしるしがあるのでしょうか.」ルカ 21:7

それからイエスは、神殿と都が滅ぼされる西暦70年へと至る歴史を示し始め、さらに二十四節まで続けて、そこで異邦人の「時」が満ちるのはいつかを示す.

> また、彼らは剣の刃に倒れ、捕囚として万国に連れ去られる.エルサレムは、異邦人の時の満ちるまで、異邦人に踏みにじられる.ルカ 21:24

この節が文字どおりのエルサレムを指しているという考えは、象徴的表現を文字通りに適用し、預言の成就をもっぱら世の終わりに置く、未来主義と呼ばれるカトリックの神学的愚かしさに基づいている. この節の正しい適用への攻撃は、新約聖書が読まれてきた全期間を通じてサタンの主要な攻撃であった. キリストの時代に、文字どおりの預言が霊的な適用へと変えられたとき、文字どおりのエルサレムは預言的なエルサレムの象徴であることをやめた.
この啓示は、使徒パウロによって確立された重要な教えであった. エルサレムが踏みにじられることは、538年から1798年までの、教皇制の暗黒時代の千二百六十年間を指し示している.

> しかし、神殿の外側の庭は除いて、測ってはならない.それは異邦人に与えられているからである.また、彼らは聖なる都を四十二か月の間、踏みにじるであろう.黙示録 11:2

預言におけるエルサレムは、十字架において選ばれた都の象徴ではなくなった.

> 古のエルサレムの土を踏むことは良いことだと感じ、救い主の生涯と死の舞台となった場所を訪れれば自分の信仰は大いに強められると思っている人が、どれほど多いことか！しかし、古のエルサレムは、天からの精錬の火によって清められるまでは、決して聖なる場所とはならない.Review and Herald, 1896年6月9日.

イエスは二十四節で弟子たちを1798年の「終わりの時」へと導いたのち、第一の天使の宣言が歴史に登場したミラー運動の時代を示された.

> そして、太陽と月と星にしるしが現れ、地上では諸国民が途方に暮れて苦しみ、海と波が鳴りとどろく.人々は、地上に起ころうとしている事柄を思って恐れにおののき、気を失うであろう.天の諸々の力が揺り動かされるからである.そのとき、人々は、人の子が力と大いなる栄光をもって雲に乗って来るのを見るであろう.これらのことが起こりはじめたなら、身を起こして頭を上げなさい.あなたがたの贖いが近づいているからである.ルカによる福音書 21章25-28節.

ミラー派の歴史の幕開けを告げたしるしは、神の御言葉の決して失敗しない力に即して成就した.

> 「太陽と月と星に現れたしるしは成就した.」 Review and Herald、1906年11月22日.

ルカによる福音書21章の続きは次回の記事で取り上げます.

> 1848年12月16日、主は、天の力が揺り動かされる光景を私に見せてくださった.私は、主がマタイ、マルコ、ルカに記されたしるしについて語られる際、「天」と言われたときは天を、「地」と言われたときは地を意味しておられるのを見た.天の力とは太陽、月、星である.それらは天にあって支配している.地の力とは、地上で支配している者たちである.神の御声が響くとき、天の力は揺り動かされる.そのとき、太陽と月と星はその位置から動かされる.それらは消え去ることはないが、神の御声によって揺り動かされる.
>
> 「暗く重い雲が湧き上がり、互いにぶつかり合った.大気は裂けて後ろへ押しやられ、私たちはオリオン座にある開いた空間を通して見上げることができた.そこから神の御声が響いてきた.聖なる都はその開いた空間を通って下って来る.私は、地上の諸権力が今揺り動かされており、出来事が順序正しく起こっているのを見た.戦争と戦争のうわさ、剣、飢饉、そして疫病が、まず地上の権力を揺り動かす.その後、神の声が太陽、月、星、そしてこの地球も揺り動かす.私は、ヨーロッパにおける諸権力の揺れ動きは、ある者たちが教えるような天の諸力の揺れ動きではなく、怒れる諸国民の揺れ動きであるのを見た.『初期の著作』41.」